# 町と村の夏まつり

日本人にとっての年中行事は、自然がもたらす季節感と農事暦の 中で、毎年繰り返されてきました。夏とは立夏から立秋前までの間 にあたります。

夏の民俗行事は、きびしい暑さがもたらす災いを避けるために行 われてきました。町にあっては疫病を避けるために、加えて、村に あっては作物の病害虫を追い払うことが人びとの願いでした。

神仏習合の江戸時代には祇園牛頭天王をにぎやかにまつり、神と 人が一体となって災いをもたらす悪霊をはらう夏祭りが行われ、明 治以降は八坂神社や八雲神社の祭礼に引き継がれています。



# 村の夏まつり

初夏、かつての桶川の人びとは、梅雨の晴れ間の酷暑の中、刈り取った麦の始 末や田の草取りに追われていました。村人が助けあう大麦の脱穀作業で歌われた 麦打ち唄にはこんな歌詞が伝えられています。

「庭には麦が川ほどし 「この(麦打ち) 唄はよう 暑さしのぎの投げ節」

「村の夏まつり」は、夏の暑さがもたらす疫病を避け、麦の収穫を喜びながら 稲の健やかな成長を祈る行事でした。人びとは強い力をもつ獅子とともに田畑や 各戸をめぐって悪霊をはらいます。

現在でも、村まわりの伝統をもとに、コミュニティを確かなものとする行事と して続いています。



獅子頭に供えた小麦饅頭(薬師堂)

### 村まわり行事

桶川市内の村まわり行事は、幟を先頭に、獅子頭と天狗、これに囃子連が同行します。このような行事は、市内 東部の倉田、川田谷の薬師堂と岡村、上日出谷と下日出谷で行われていますが、近年、日出谷地区では若者による 神輿の渡御が盛んになっています。



村まわりの獅子頭(薬師堂)



村まわりに同行する囃子連(倉田)



神輿の渡御(上日出谷)

#### 展示資料、前領家の村まわり

前領家のささら獅子舞は、江戸時代に川田谷の領主だった 旗本牧野氏のもとで盛んになったと伝えられています。

毎年7月中旬に行われる村まわりは、王子稲荷神社を出発 し、全戸を結ぶ「獅子まわりの道」に沿い、当番長を先頭 に、笛方、宰領、獅子の順に進みます。各家を訪れた一行 は、家の縁側から土足のまま座敷に上がりこみ、おどし笛に 合わせて悪魔ばらいを行って玄関から去っていきます。





酷暑の中での道中、獅子頭や面をつけて進む村まわりの一行は区長宅や 新築の家を宿として接待を受けます。

夏の悪疫を避けるために戦時中も中断することなく続いたささら獅子舞 の村まわりは、今でも前領家地区の人びとにとって欠かせない行事として 大切に受け継がれています。

#### 町の夏まつり 桶川祇園祭

桶川の旧市街は、江戸時代に中山道桶川宿が開かれて町の歴史が始まり、江戸時代 中期にあたる宝暦年間(1751~64)には家数が200軒を超えました。

中山道の路上に市神社を祀った頃より当地の産物を売り買いする市が立ち、元文3 年(1738)に祭礼が始まり、寛延2年(1749)には各町内の神輿がその社前に集まっ たと伝えられています。

市神社にまつられた祇園牛頭天王は強い威力で悪疫を退けるとされ、その祭りは 「町の夏まつり」として全国に広がっていました。江戸時代の文書に天王祭と記録さ れている桶川祇園祭も桶川宿の発展とともに隆盛を迎え、紅花で栄えた江戸末期には 山車の繰り出す華やかな町の祭礼としてたくさんの観衆を集めるようになりました。

中山道の宿場としての役割を終えた明治以降も、近郊の農村が産出する良質な麦の 集散地として町の繁栄は続きます。桶川の農村では、「麦の始末は祇園まで」という言葉が伝えられていました。

初夏、農家の人びとは、桶川の町に麦を出荷するまで厳しい農作業に耐え、祇園祭を待ちわびたのです。 しかし、戦時中に食糧統制の中で町の麦問屋と農家の関わりが失われ、町の活力も衰えてしまいました。昭和35 年(1960)には、桶川祇園祭は一時休止することになってしまいました。



#### 展示資料. 夫婦獅子と山車人形

#### 本街保存会の夫婦獅子

この雌雄一対の巨大な獅子頭は安政4年(1857)に作られたと伝 えられています。江戸時代、獅子は神の威力を象徴するものとして 神輿や山車の先頭にあって悪しきものをはらいました。

本街保存会は、明治以来、長く山車蔵に保管されていたこの獅子 を昭和57年(1982)に修理し、舞の復活にも取り組みました。







山車人形 (市指定文化財)

桶川祇園祭の山車は、昭和初期に屋台形に 改造されるまで、人形や作り物をいただいて いました。この2体の人形は、山車から下ろ された後も町内の祭会所におかれています。

八雲会の神武人形は旧立花町(下町)、栄 会の関羽人形は旧栄町(下中町)の山車に飾 られていました。関羽人形は、明治25年 (1892) に、生人形師松木(本)喜三郎の門 人である石村定吉によって新調されたと台座 に記されています。

八雲会 神武天皇(左)・栄会 関羽(右)

## ふたたび集う人びと 桶川祇園祭の再生と発展

昭和42年(1967)、桶川町は住居表示の変更を行い、中山道桶川 宿の伝統をひく町会は存続の危機を迎えました。町内の人びとは、 相生会、本街保存会、栄会、八雲会を結成し、中断していた桶川祇 **園祭の伝統を継承するべく努め、昭和45年の市制施行を経て、桶川** 祇園祭は復活をとげました。

当時の桶川市は、住宅地化が進み、人口の急増期でした。町の保 存会が担い、神輿や山車が繰り出す伝統の祭りは、大勢の市民が集 う都市桶川の祭りとして、今日も発展を続けています。





#### 子ども囃子の継承

桶川祇園祭では、町内の山車で子どもたちが囃子や踊りを演じてい ます。この伝統は、昭和42年に子供会活動として祭囃子に取り組んだ ことに始まります。当時の子供会の会長さんは、楽しかった祭りの思 い出を子どもたちに伝えたかったとおっしゃっていました。

この活動は、各町内の保存会に引き継がれ、町の人びとの支えによ って継承されています。世代を重ねながら、祭りを担う人財が育ち、 その活力によって桶川祇園祭もまた成長を続けています。